

特集 徳山ダム導水路

木曾川水系連絡導水路計画から15年（粕谷志郎）	1
情勢・活動報告	2
おさらい徳山ダム導水路（武藤仁）	4
岐阜県民にとって大迷惑な徳山ダム導水路（近藤ゆり子）	6
自然に対する思いあがりに終止符を！（小林収）	8
木曾川水系連絡導水路計画の取水予定地西平を歩く（粕谷豊樹）	11
岩田健三郎さん（「えほん長良川」作者）を訪ねて（田中万寿）	13
岐阜シンポジウム・「愛知県民講座」のお知らせ、本の紹介「魚はなぜ減った？」	16
訃報「高木久司さん」「河合良房弁護士」、事務局より	17
よみがえれ長良川参加団体紹介：横越「遊水地」問題学習会（野津牧）	19

No.36

2022年3月12日

木曾川水系連絡導水路計画から 15 年

長良川市民学習会 代表 粕谷志郎

15 年前、突然徳山ダムの水を長良川に流す計画が公表されました。そもそも、何の意味かも分からない計画でした。涸れたこと無く、とうとうと流れる長良川に、徳山ダムの溜まり水を流す？ あり得ない、と言うのが私たちの出発点でした。そこで、どういう計画かを「学習」しようとスタートしました。

導水路計画がどのようなものかと言いますと、徳山ダムに貯めた水を下流の西平ダムまで落とし、ここからほぼ地中をコンクリートのトンネルで木曾川に持って行って流そうと言うのがその骨子です。西平ダムから終点の坂祝までほぼ直線で結ぶと長良川を藍川橋下流の古津あたりで横切ります。一部の水を長良川に流して、下流で木曾川に戻せば、長良川から木曾川までのトンネルが細くて済む、費用削減になるというものです。こういうのが机上の空論と言うのでしょうか。そもそも、長良川は他所から水を引いてくる必要が全くない川です。

ダムに貯めた水は水温が低いのが特徴です。当会のメンバーは 10 年以上にわたり、月 1 回、同時刻に西平ダムと千鳥橋あたりの水温を測定しています。常時、西平の水温が低いのですが、夏場はその差も大きく、5 度を超える年もあります。計画の当初は常時長良川に流すということでしたが、渇水時だけに流すと計画を修正してきました。導水路が出来てしまえばどうとでも使えますので、こんな妥協は朝飯前です。夏の渇水時に 5 度の水温差のある水を流したらどうなるでしょう？ 徳山ダムから引いてきた冷たい水は下にもぐります。上に流れてきた暖かい長良川の水が層をつくれます。酸素は空中から上の層には供給されますが、下の層には移行しません。そうすると川底は低酸素状態になります。おまけに、ダムの水は藻類が増え、有機物が多い状態です。川底にヘドロがこびりつくことは目に見えています。古津には宮内庁御用達の御料鵜飼場があります。その下流には長良川鵜飼場があります。机上の空論では済まない、長良川の環境破壊です。

導水路計画は、民主党政権発足間もなく、凍結されました。この時凍結された 48 事業の一つでした。その後、再び政権交代となり、ほとんどの事業が再開されましたが、この導水路計画のみ凍結のままとなっています。10 年以上進展は無かったのですが、中止とはなっていません。いきなりの再開を警戒しなければなりません。



2008 年 9 月 25 日 毎日新聞



2008 年 10 月 9 日中日新聞夕刊

情勢と活動報告

長良川市民学習会 事務局長 武藤 仁

前号（35号）発行の10月1日以降の情勢と活動報告をします。

長良川河口堰環境調査

新型コロナ感染の収束が見通せず、恒例の「長良川下流域環境観察会」は中止させていただきました。しかし、環境状況を記録することは必要でしたので、事務局メンバーで11月6日環境調査を行いました。河口堰周辺の川底はヘドロがたまり、長良川のヨシ原ではカニの姿もみえませんでした。調査結果報告書は、当会ホームページ <http://dousui.org/> をご覧ください。



愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会



第18回愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会が1月11日（火）に開催されました。コロナ感染まんえん防止感染防止期間中で一般傍聴はできませんでした。委員会では、「長良川河口堰最適運用検討委員会10年の検討の整理と、変化の時代における長良川河口堰の課題と取り組みの方向」が検討されました。117ページにわたる報告書と一般市民にも分かりやすいパンフレット「長良川河口堰これから？」（左図）が提案され、3月26日（土）に開催される県民講座の会場で配布されます。講座では、検討委員でもある私がパンフレットを使って報告させていただく予定です。関心のある方は、ぜひご参加ください。感染防止のため定員が限られています。早い目に事務局である愛知県水資源課に申し込んでください（p16参照）。

いよいよナクトンガン（洛東江）河口堰が常時開門に

河口堰開門をめざし長良川市民学習会は、韓国の河川環境市民団体や釜山広域市と情報交換や現場見学を行い、交流を深めてきました。そして今年2月18日、いよいよナクトンガン河口堰が常時開門することになりました。

韓国第二の都市プサン市を流れるナクトンガン（洛東江）の河口は広大な湿地が広がり有名な渡り鳥の飛来地です。シジミ漁はとても盛んで日本にも輸出していました。ここに釜山市の水道や金海市の工業用水の水源確保を目的にナクトンガン河口堰が1987年に建設されました。



しかし、長良川と同様に河口堰の運用と同時に、シジミ漁は絶滅。とりわけ滞留による水質被害は甚大で、水道の取水口も15km上流に移動させなければならないほどでした。

環境悪化に危機感を感じた市民が「河口堰開門」を呼びかけ、2012年「汽水域生態系復元のための協議会」が発足しました。

この動きは、釜山市を動かし河口域の環境調査と「開門した場合の環境影響」の研究が始まりました。これには、国の環境部も参加し、精密な塩水遡上のシミュレーションを行うことができ、その結果「開門の可能性」に合意が広がりました。国（国土交通部）と事業者は開門の実証実験は拒みましたが、開門を公約した新政権発足のもと2019年から開門実験が始まりました。

試験開門を3年経た現在、すでにウナギ、サケ等多様な魚種が戻ってきました。最新のシミュレーションに基づき塩水遡上をコントロールしていますので、農業の塩害も発生していません。汽水域が回復し、シジミや渡り鳥を支える生態系の復活も始まっています。

試験開門の実績に確信を持ち、本年2月18日日常時開門に移行しました。韓国聯合ニュースによれば、今後ゲート制御しながら3月までに9km、今年末までに12kmまで自然に近い汽水域を拡大する予定のようです。

常時開門が始まった2月18日には、「河口堰開門」を公約に掲げた文在寅大統領から祝辞が寄せられました。

2022年3月2日中日・東京新聞（夕刊）

通常、川の河口付近では真水と海水が混じり合う「汽水域」が形成され、多様な生き物のすみかになる。河口堰は、海水が川に入り込むのを可動式の水門で遮断し、上流での安定的な取水を可能にするなどの目的で造られる。

一九八七年に洛東江河口堰が完成する前は、上流二十六キロにある釜山市が使う水道の

韓国・釜山の洛東江

韓国最長の河川・洛東江が海へ注ぐ釜山市。35年前にできた「洛東江河口堰」の影響で悪化した一帯の生態系を復元しようと、河口堰の水門を原則的に開放する試みが先月から始まった。2017年に就任した文在寅大統領が公約に掲げていた。日本でも長良川河口堰（三重県）などで市民団体が同様の開門を求めており、先行事例として注目されそうだ。

（釜山で、木下大賀）

釜山市で、従来の海水の流入を防ぐ運用の見直しを始めた洛東江河口堰—木下大賀撮影

生態系再生へ河口堰開放

取水場まで塩分を含む水が遡り、取水を中断せざるを得ないこともあった。当時は生活用水や農工業用水の供給が優先され、河口堰を建設した。だが、汽水域が消えたことで、地元の名産だったシジミやウナギなど多くの生き物が姿を消した。周辺は東洋最大といわれる渡り鳥の飛来地だが、えきになる水辺の植物も激減した。

一月十八日から始まった河口堰の新たな運用は、潮の満ち引きに合わせて水門を調整しながら一定量の海水を流入させ、ひとまず上流十二キロまでの範囲で汽水域をつくる。農業用水を引き入れる水門が

ある十五ヶ地点まで塩分を含む水が届かないよう、海水の流入量、川の塩分濃度などをモニタリングしながら進め、生態系の変化を観察する。将来的にはさらに汽水域を拡大することも検討する。

河口堰の西側には農業地帯が広がり、塩害を心配する農業者らが開門に反対してきた。このため、周辺の地下水に影響が及ばないかも常時監視している。

河口堰を管理する韓国水質源公社の金和榮・釜山支社長によると、取り組みの基本になったのは「利害関係者の合意」と「科学的データの蓄積」だ。

洛東江の水位、塩分濃度などを監視しながら河口堰をコントロールする施設—木下大賀撮影

昨年5月、試験的に開門した洛東江河口堰の上流ではウナギの姿が確認された—金敬哲さん提供

一七年に公社や政府の関連部署、地元自治体などで実務協議会を発足。その後、市民団体や農業者も加わった協議会で河口堰の運用や生態系復元を検討することになった。

長良川河口堰巡り、日本からも運用注目

「産業界が優先だった時代が転換し、環境の価値が高まった」と考える金さんは、長良川河口堰の試験開門を求め、長良川河口堰の設置に反対する市民団体とも交流を続けてきた。岐阜市の「長良川市民学習会」の武藤仁さん（60）は「長良川河口堰の場合は国が関係者の協議の場の設置に尽きないため前進がなかったが、世界では河口堰の開門が本流になっている。洛東江の成果を学んで世論をへりに生かしたい」と話す。

「昔この辺りにはウナギの店が多く、シジミは日本にも輸出していた。生き物が戻れば汽水域を取り戻す」という市民の意識も高まる。地元環境団体理事を務める金敬哲さん（50）写真、木下大賀撮影は期待を込める。河口堰の開放を求める市民運動が本格化したのは十五年ほど前だった。二年には国会議員選挙に釜山の選挙区から出馬した文大統領が、金さんらの働きかけで河口堰の開門を公約に掲げ、一七年の大統領選でも掲げた。

「産業界が優先だった時代が転換し、環境の価値が高まった」と考える金さんは、長良川河口堰の試験開門を求め、長良川河口堰の設置に反対する市民団体とも交流を続けてきた。岐阜市の「長良川市民学習会」の武藤仁さん（60）は「長良川河口堰の場合は国が関係者の協議の場の設置に尽きないため前進がなかったが、世界では河口堰の開門が本流になっている。洛東江の成果を学んで世論をへりに生かしたい」と話す。

専門家も河底の地形データを基に、海水を流入させた場合の動きをシミュレーション。一九年から実際に河口堰の一部を開けて実証実験が始まり、昨年は季節ごとに計四回実施した。一月月程度、海水を入れても地下水の塩分濃度に変化は見られず、ウナギやサケ、ボラなどさまざまな魚類が川に戻ったのが確認された。

おさらい「徳山ダム導水路」

長良川市民学習会 武藤仁

動かないまま 15 年経とうとする徳山ダム導水路

徳山ダム導水路？なに、それ？もう終わってたんじゃない？・・・

「長良川に徳山ダムの水はいらない！」と訴え続けてきた私たち長良川市民学習会としては、とてもつらい言葉です。しかし、それも仕方がないことかもしれませんね。事業「凍結」。現場では 1 m の工事も着工されていない。マスコミも取り上げなくなりました。目に見えるものは何もない。15 年も！経とうとするから。なんせ反対運動の狼煙を上げることになった 2008 年 1 月 16 日「長良川に徳山ダムの水はいらない！」市民学習会の前夜に生まれたわが初孫が来年高校受験！なのです。こんなに、ながあ〜い戦いになるとは思いもしませんでした。

昨年、6 月 3 日、「木曾川水系連絡導水路関係地方自治体検討会議」第 5 回幹事会が開催されました。そこでは「令和 4 年度以降も新たな段階に入らずに環境調査を継続しつつ、引き続きダム事業の検証に係る検討を進めるものとする。」とまとめられたようです。では、これからもながあ〜い「凍結」が続くのか？

私たち市民学習会は決してそうは考えません。ダムをめぐっては、かつて知事も反対表明していた熊本県の川辺川ダムや滋賀県の大戸川ダムが建設に向かうという反動の動きが急速に強まっています。最近の甚大な災害をうけ「リスク管理型社会の構築」という論理で導水路事業の強行を狙っていることは間違いありません。

国、事業者にとっては、徳山ダム導水路は法的に「木曾川水系河川整備計画」に位置付けられているという錦の御旗があるにもかかわらず着工できない「メンツ丸つぶれ」の状況です。事業継続、着工の動きが突然出てくることは間違いありません。しかし、長い時間のうちに私たちの仲間・ニュース読者の皆様も導水路事業の内容を忘れてしまった方も多いかと思います。そこで思い出すために、本号では「徳山ダム導水路」特集を組みました。紙幅の制限から「東濃渇水問題」「発電用水問題」については、次号で詳しく取り上げたいと思います。

そこでまず導水路問題の「おさらい」です。

徳山ダム導水路（木曾川水系連絡導水路）は、表紙のルート図のように徳山ダム（2008 年完成）から流される水を揖斐川町にある西平ダム湖で受け、そこから直径約 4 メートルのトンネルで、長良川と木曾川に送るものです。さてここから、数字が出てきますので下の図を使いながら説明します。

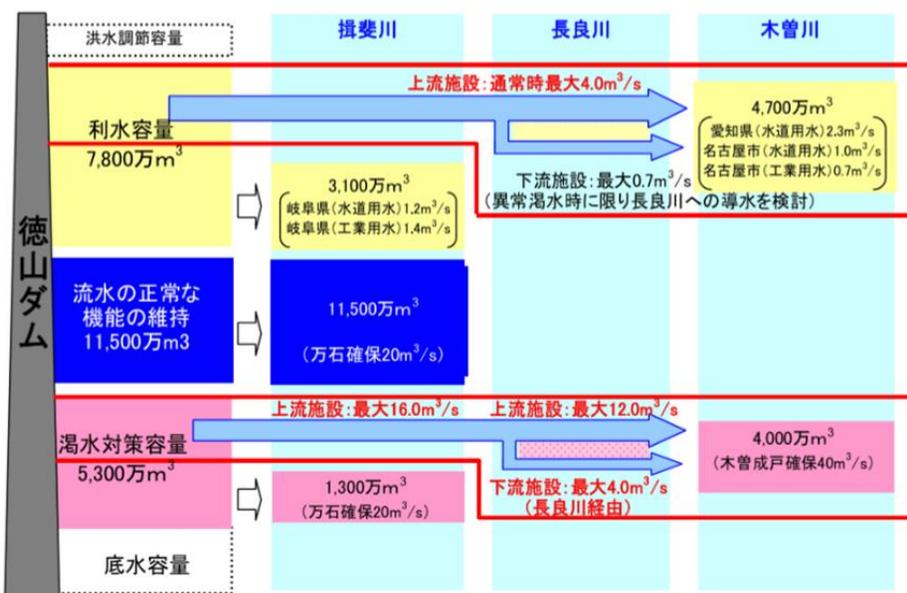


図-1 徳山ダムと導水路

第 1 回木曾川水系連絡導水路事業の関係地方公共団体からなる検討の場（幹事会）2010 年 12 月 22 日説明資料より



図-2 徳山ダム導水路建設費負担額

図-1の一番左は高さ161mの徳山ダムに貯められる水量を表しています。総貯容量6億6,000万 m^3 は、わが国でランキング第1位。その内訳を上から順に見ていきましょう。

「利水容量」7,800万 m^3 （黄色）のうち→愛知県水道用水に毎秒2.3 m^3 、名古屋市水道用水に毎秒1.0 m^3 、同市工業用水に毎秒0.7 m^3 を図中→で示す「導水路」で取水口がある木曾川（岐阜県坂祝あたり）に導水します。ただし名古屋市工業用水は途中岐阜市内で長良川に放流し下流木曾川と接近するあたりで→木曾川に導水します（これには、岐阜市民の猛反発にあい、「異常渇水時に限り」検討と提案を引っ込めました）。

しかし、これらは全く必要ないものです。もう4半世紀以上前に完成した長良川河口堰（1995年）の水も愛知県上水道は34%しか使っていません。名古屋市水道に至っては一滴も使っていません。さらに、名古屋市工水はお客がなく企業として成り立たないほど悲惨な状況です。こんなところに何で揖斐川の水を導水するの？

その下段の3,100万 m^3 は岐阜県です。徳山ダム計画時から「上水道、工業用水の給水のアテが全くない」のに事業を推進し、県民に厳しい負担を、世代を渡って押し付けています。詳しくは次ページ「岐阜県民にとって大迷惑な徳山ダム導水路」をご覧ください。

次に「流水に正常な機能の維持」11,500万 m^3 （青色）は、揖斐川に使うものですから今回の導水路とは関係ありません。何のために使うのか？「川が川らしく渇水時でも一定の水が流れるようにする」ためのものだと思います。河川官僚や技術者には、渇水のときでも水路のようにダムから川に一定流量で流すことが夢のようです。でも、揖斐川流域の漁師は、徳山ダムの冷たい水はあまり流してくれるなど要望しています。揖斐川河口のシジミ漁獲量も徳山ダム運用後著しく減っています。

この摩訶不思議な「流水に正常な機能の維持」容量。大きなダムを建設するには、とても良い理由にできるのです。徳山ダムでも利水容量よりずっと大きいのですが、財源は料金でなく税金で薄く広くとれるので国民に抵抗がないという「メリット」があるようです。

次の「渇水対策容量」5,300万 m^3 （ピンク）。これが、徳山ダム導水路の一番の問題とってよいでしょう。

図-1では「渇水対策」からの導水路→の太さは、「利水」と比べ小さく描かれていますが、利水：毎秒4 m^3 に対し渇水対策は毎秒16 m^3 ですから、水理計算上はずっと太くなります。それだけ建設費の占める割合が大きくなり、図-2のように「治水」66%となります。ここで、いきなり「渇水対策」が治水といわれると????

そうなんです、この「渇水対策」というのが人を惑わすのです。そもそも始めの徳山ダム建設計画には渇水対策容量はありませんでした。これは、1996年名古屋市が水需要の増加が見込めず建設から一部撤退する際、「渇水の時にお使いください」と言って返上した水利権毎秒3 m^3 です。

しかし、「お使いください」と言われてもどの自治体も、もう水は要りません（2004年愛知、岐阜も部分撤退）。そこで考えられたのが、「異常渇水時の河川環境を改善する」水量としようということになりました。ですから渇水時の飲料水補給でも工場への給水のためでもありません。では、だれのため？

国の説明では、木曾川ではヤマトシジミが、長良川ではアユが死滅しない程度の水量を流すためと根拠づけました。シジミや魚からは建設費を徴収できないので「治水」という名で、国民から広く徴収しようというのです。ですから導水路でいう「治水」は、洪水と全く関係ありませんし、「渇水対策」といっても飲料水とは関係ありません。しかも、この異常渇水とは通常の10年に1度程度の渇水ではなく平成6年の時のような100年・200年に1度あるかないかの渇水を想定していますので、毎秒16 m^3 が流されることは、私たちの目が黒いうちはないでしょう。たとえ流せたとしても、その水は、ダムの底にある「死に水」でしょう。長良川も死にます。

岐阜県民にとって大迷惑な徳山ダム導水路

－徳山ダムというお荷物をさらに重くして「治水対策」を遅らせる－

徳山ダム建設中止を求める会 近藤ゆり子

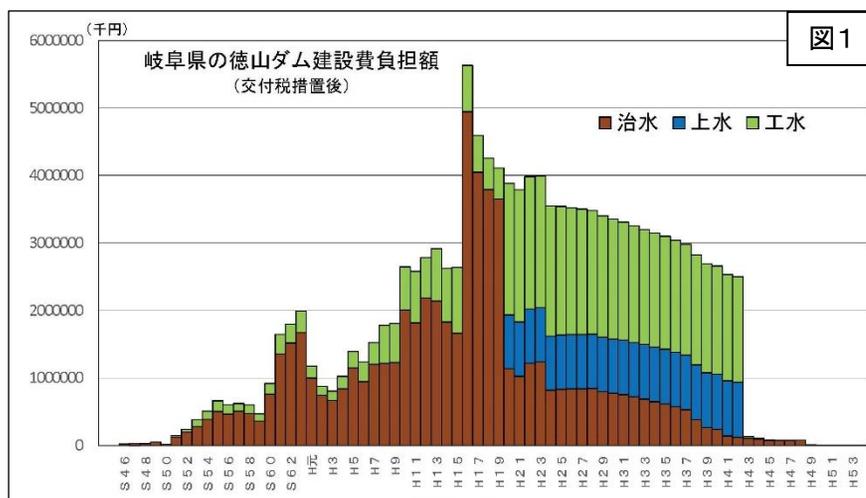
徳山ダム導水路の岐阜県負担分は約30億円。これは「異常渇水時に長良川の『環境保全』のために徳山ダムの水を流して貰う」ための治水負担分である。異常渇水時に長良川に冷たい徳山ダムの水を流せば、河川環境に壊滅的な打撃をもたらす。「要らない」どころか拒否すべき水の代金ということになる。「異常渇水時の長良川の環境保全のために徳山ダムの水が欲しい、ついでには30億円を出す」では、さすがに県議会の与党議員を納得させることも難しい。だから「異常渇水のとときに東濃地方で木曽川の水を確保するため」という屁理屈を言い出した。犬山辺りで徳山ダムの水を流すことが、なぜずっと上流の東濃地方での取水をラクにするのか？普通に考えてわかるはずがない。なので、普通の人にはわかりにくい難しげなダム放流量と取水量の関係のルールだとかを持ち出そうとするようだが、理屈が通るはずがない。岐阜県がもっている利水者としての徳山ダムの水の権利は、揖斐川での取水を前提にしたものであって、東濃地域で木曽川から取水する権利とは全く関係ない。国交省のいう「木曽川水系の統合運用」も、「(名古屋市が)長良川河口堰取水の専用施設を作ったら」という前提付きなので、実際には実施できない。

そもそも河川法には「異常渇水」のときには、河川管理者（一級河川であれば「国」＝国交省）が主導して、通常のルールを超えて水利使用者が協議し、必要なら水を融通しあうという規定があるのだ（河川法53条、53条の2）。「徳山ダム導水路の負担分約30億円を出さないから、岐阜県は、異常渇水時の水利調整で苛めてやる、水はやらない」という話にはならない。徳山ダム導水路は、何をどう考えても「岐阜県のため」にはならないのだ。

要らない徳山ダムの水にお金を払い続ける岐阜県

日本一の大ダム・徳山ダムは、2008年の運用開始から14年になるが、確保された新規利水は一滴も使われていない。岐阜県は、徳山ダムの水を大垣・西濃地域で使うとされている。使うためには新たに専用施設（取水・浄水施設）を建設しなければならない。が大垣は地下水の豊富な場所である。市のHPでも「湧き水」をPRしているくらいだ。大垣市の水道は、地下から汲み上げた水に最低限の塩素を投入するだけで配水している。夏は冷たく、冬は暖かい美味しい水である。新たに専用施設を建設し、浄水にお金をかけてまで徳山ダムの不味い水を使うという話になるはずがない。

岐阜県の長期水需給計画は、徳山ダム事業費の大幅増額問題で揺れる中



H20=2008年、H33=2021年、上水・工水の償還が終わるのは2030年。一般的にはダム建設費の「治水」分は、年度毎に払い、ダムの「完成・運用開始」以後はゼロになるが、岐阜県は払い続けている。2004年の徳山ダム事業費の大幅増額の際に、「利水」分の割合を縮小し、「治水」分を大きく増やしたために、岐阜県の「直轄負担金」が大きくなった。岐阜県の財政規模ではいっぺんには払いきれないので起債をし、その償還が続いてきた。

での 2004 年の木曾川水系水資源開発基本計画（フルプラン）改定に合わせて策定されたものである（いまだに更新されていない）。「徳山ダムは要る」という結論ありきで作られたものであり、「水需要は今後も伸びるはずだ。異常渇水時にも徳山ダムの水を確保していれば安心だ」という具体性も合理性もない計画だ。

幻の「安心」のために、岐阜県民は、必要のない徳山ダムの水にお金を払い続けている（〔図 1〕参照 ※1）。岐阜県は 2009 年には「起債許可団体」（債務が大きすぎるので、新たな起債には国の許可が必要になる）に転落している（～2012 年まで）。梶原県政下で、徳山ダム建設などの大型公共事業を推進し、さまざまなハコモノを作り続けた結果だ。起債許可団体から脱したとはいえ、岐阜県財政の厳しさは続いている。そして、徳山ダムの水の代金支払い分は、あろうことか、一般会計から支払われている（地方財政法 6 条違反。※ 2）。本来、医療・福祉や教育など、住民の命や未来のために使うべきお金が削られているのだ。

※1：たまに「岐阜県は徳山ダムの水は要らないのだから、権利を国に『返上』してお金を払わないで済むようにするべきだ」という意見が聞かれる。現行の制度では不可能だ、ということはあえて横に置くとしても、「ではその分のツケを誰が払うのか？」と問いたい。2004 年の徳山ダム事業費大幅増額の直前、建設省（当時）は、利水者がダム建設事業から「降りる・降りない」を具体的に検討することができるように「撤退ルール」を定めた。だが梶原県政下の岐阜県は、撤退の検討どころか他の利水者（愛知県、名古屋市）が撤退しないように積極的に画策した。岐阜県民は、建設省内部からさ異論も出ている徳山ダムの建設を強引に進める梶原拓を知事として居座らせることによって、徳山ダム建設を推進してしまったのだ。この事実を直視することなしに、徳山ダム建設の賛否など一度も聞かれていない全国の納税者一般にツケを肩代わりさせようというのは、有権者としてあまりにも無責任だと筆者は考える。

※ 2：私たちは徳山ダム公金支出差止訴訟で地方財政法違反を争ったが、裁判所は「将来、公営企業会計から一般会計に返済しないと断定できない」として私たちを敗訴させた。

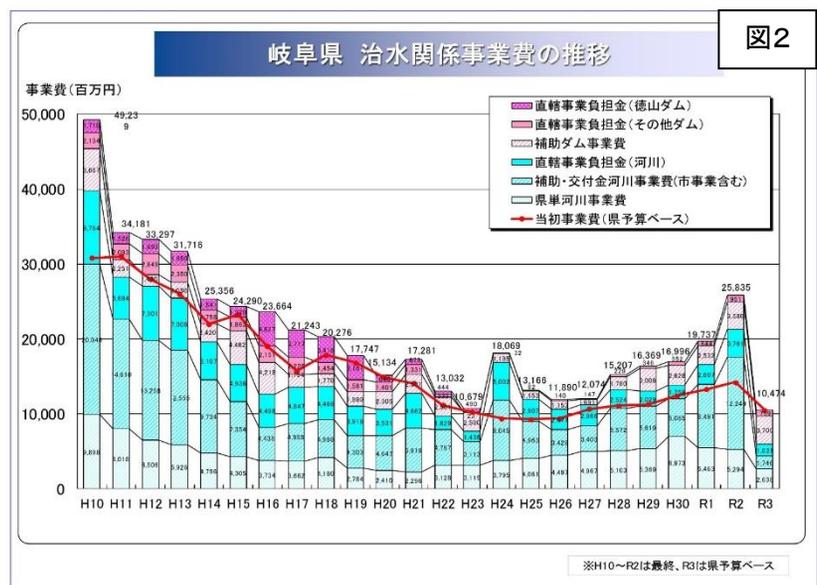
財政逼迫がもたらす「治水」対策の遅れ

2004 年の徳山ダム事業費の大幅増額の際、当時の梶原拓・岐阜県知事は、負担増を渋る愛知県や名古屋市に積極的に「継続」を働きかけるとともに、岐阜県民には「徳山ダムさえできれば揖斐川流域は枕を高くして寝られる」という大嘘のキャンペーンを張った。徳山ダム集水域 2 5 4 km²、「連携運用」される横山ダム集水域 4 7 1 km²に降った雨については、何らか「役立つ」かもしれないが、根尾川流域の降雨には役立たない。「ダムがあれば安心」という考え方こそ危険であることは、最近頻発する線状降水帯による大洪水による全国の被害をみても明らかである。

洪水時の「想定外（計画高水位超）」の水位上昇は必ず起こると覚悟しなければならない。すぐに破堤するようなヤワな堤防では命は守れない。岐阜県の「要整備河川」の延長は 2 6 5 k m もあるが「1 0 年間で優先度の高い 5 0 k m を整備する」という計画しか立てられない。絶対的に「お金が足りない」からだ。（〔図 2〕参照）

岐阜県の「治水関係事業費」は年間 1 0 0 億円～ 2 0 0 億円の規模である。毎年 2 5 億円余の「要らない水の代金」の負担が巡り巡って、「治水関係事業費」を圧迫している。巨大ダム・徳山ダムは、岐阜県の「治水」対策を遅らせているといえる。

この上、「要らない」どころか長良川の生態系を壊滅させかねない徳山ダム導水路に「治水」のお金を投入するなどトンデモナイと強く言いたい。



自然に対する思いあがりに終止符を！

小林 収（リニアを問う愛知市民ネット）

「導水路はいらない！愛知の会」の仲間と共に提起した木曾川水系連絡導水路公金支出差止訴訟が上告棄却決定で敗訴になってから6年になろうとしているが、未だ国の検証事業として凍結状態のままであり、その命脈を保つためかのように、毎年2億円余の予算付けがされている。私はそこに「水資源族」の執念と空恐ろしさを感じる。

自然を制御できるという思いあがり

訴訟は愛知県知事らを被告とした、公金支出差止を争点としたものであったが、導水路を造らせてはならないという思いの出発点は、水を量としてしか考えずに事業計画をする「水資源族」への怒りであった。揖斐川の水も、長良川の水も、木曾川の水も、それぞれの河川の生態系の中で育まれた固有の質を有しているのであるから、単なる水量として計算し人工水路で繋ごうとするのは、自然に対する思いあがりであり冒涇である。この気持ちは、清流長良川を愛する人々に特に強いものがある。

人類は自然を制御できるという思いあがりの最悪の結果が原発事故であることには異論がないと思うが、現在全国各地で住民が問題を提起している公共事業やインフラ事業には、根底において自然は科学技術で制御できるものだという考えで計画されている共通点があると感じられる。その顕著なものに私が関わっているリニア中央新幹線事業がある。

私がリニア事業に強く関心を持つようになったのは、福島原発事故直後の2011年5月に、国交大臣がリニア新幹線にゴーサインを出したという、さほど大きくない新聞記事を見たときである。率直な表現をすれば、「原発事故を起こしておきながら、いまさらリニアとは何事か」という思いであった。

一民間企業の事業としてはじまったリニア新幹線

リニア中央新幹線事業は、品川～名古屋駅間286kmを40分で結び、その内86%が直径14mのトンネルであり、トンネルは都会部では大深度地下と言われる地下深くを潜り、中央部は南アルプスの地中を東西に横断する計画である。事業費は当初5兆4千億円とされたが、昨年になってJR東海が7兆円を超えると修正した。

ここで注意すべきは、リニア事業は公共事業ではなく、JR東海が2007年に自力で資金繰りをして建設すると言い出したもので、一民間企業が行う事業に国が認可というお墨付きを与えたに過ぎないという珍しい事業であることである。2016年に安倍首相（当時）と葛西JR東海名誉会長との「お友だち」関係によって3兆円の財政投融资の貸与がされたことで、国家的事業になったとも言えよう。そのために、事業の立ち上げの際に国会等において国家的事業に値する議論が全くされなかったことは、国民にとって不幸と言わざるを得ない。

自然からのしっぺ返しに立ち往生

さて、2014年の事業認可以来、JR東海は工事を強行してきたが、工事が進めば進むほど、自然からのしっぺ返しが大きくなって、立ち往生の感があるのが現在の様相である。

リニアに関する報道では、大井川の水問題をめぐる静岡県とJR東海の対立がマスコミで伝えられ、あたかも静岡県だけが反対しているためにリニアの2027年開通が間に合わなくなったかのように受け取られているが、事実は違って、リニア事業は沿線各地で大幅に遅れている。

まずは事業着工前から問題とされていたトンネルの掘削から排出残土の処分地の問題である。この問題は、そも

そも環境アセスメントの対象にすらされておらず、住民はそのこと自体が環境アセスメント法違反だと指摘してきたのである。JR 東海は、当初は山の谷間を埋めて平地を造れば、地主や住民に喜んでもらえるぐらいに安直に考えていたようであるが、工事着工前の 2014 年 8 月に広島市で発生した死者 77 名となった土石流災害、加えて、昨年 7 月熱海市で起きた死者 26 名、行方不明 1 名となった土石流災害は、人間が渓谷を徒になぶることの恐ろしさを教えてくれた。当然のことながら長野県、岐阜県の沿線住民は、まさに自らの生命・財産の問題として JR 東海の土砂処分場の要請に抵抗していて、昨年末時点で、両県で処分先が決まっているのは予定搬出量の 3～4 割程度である。処分場が確保できなければ工事が遅れるのは当たり前である。

大深度地下工事で陥没事故

JR 東海は都会部（品川・川崎間、春日井・名古屋間）の工事においても大問題に直面することになった。

計画では、都会部では大深度地下法という土地収用法の特別法に基づいて、工事に公益性があるという国の認可を得れば、原則地下 40m 以深のトンネルは地上の地主の意向に関係なく掘れることになっていた。JR 東海はその認可を 2018 年 10 月に得ている。

ところが、リニア事業より一足先に大深度地下法の認可を得ていた東京外環道の工事で、一昨年 10 月調布市の住宅地前での陥没事故が発生した。工法はリニアと同じくシールド・マシンによるものであった。事業者である NEXCO 東日本等が設置した調査委員会も、陥没事故とトンネル工事との因果関係を認めざるを得なかった。ここに至って、地下 40m 以深の工事は地上に影響しないという大深度地下法の立法根拠が喪失したのである。

JR 東海は、大深度地下法認可時の説明会では、万一の事故の補償のために事前の建物調査を求める住民に対して、「必要ない」の一点張りであったが、昨年 9 月の説明会では臆面もなく地権者に事前調査への協力を求めた。本来ならば立法根拠を失った大深度地下法の効力を直ちに止め、それでも工事をやりたければ土地収用法の基本に戻って、関係するすべての地権者に対して必要な手続きを取るべきである。

東京では真下がリニア・ルートになっている田園調布の住民が昨年 7 月、原告 24 名で JR 東海に対して工事差し止めの民事訴訟を起こした。愛知の大深度地下工事では、春日井市で縦横にある垂炭鉱跡の下にリニア・トンネルが掘られる計画であり、着工が近づくとともに住民の不安と心配が大きくなっている。

このように沿線各地での問題の発生は多様であるが、極めて大雑把に言うと、「静岡県問題」を別にしても、全体で 2～3 年程度は予定より遅れてお



道路の陥没現場では、警察による規制線が張られた=2020年10月18日午後1時過ぎ、東京都調布市東つつしヶ丘2丁目、読者提供

朝日新聞 DIJITAL より

2021年10月27日 瀬戸非常口斜坑崩落(肌落ち)現場写真 (JR東海提供)



り、それを取り戻そうとする焦りが、昨年 10 月 27 日の中津川市の瀬戸非常口斜坑での工事中の死傷事故を招いたという指摘もある。いまや JR 東海は、品川～名古屋間の開通時期を明言出来なくなった。

コロナ禍から学ぶべき教訓

さらにコロナ禍は、JR 東海の経営を直撃した。JR 東海が自力でリニア事業ができるとした財源は東海道新幹線からの年間数千億円の収益であったが、コロナ禍によるテレワークの普及は、2020 年度決算では 2 千億円の赤字となった。また、コロナ禍の愛知財政への影響も大きい。昨年 5 月刊の『あいちの財政』によれば、2020 年度末に 2,836 億円あった基金残高が 2021 度末には 1,208 億円へと激減するとされている。徳山ダム導水路の各年負担金でも節約すべき事態である。

足かけ 3 年となる新型コロナウイルスと人類との闘いは、そもそもはグローバル資本主義の地球隅々への利益追求活動による生態系の破壊からはじまったのだという指摘がある。自然の水流を勝手に制御し、人の叡智が及び得ない地下深くに勝手にトンネルを掘るような行為が、自然からしっぺ返しを受けるのは当然と言うべきだろう。

最後に付言すれば、導水路もリニアも大小の差はあれ、どちらもトンネル工事である。リニア工事について指摘した問題から導水路工事が免れる保証はないことを忘れてはならない。



トンネル-トンネル-トンネル…闇の中の新幹線

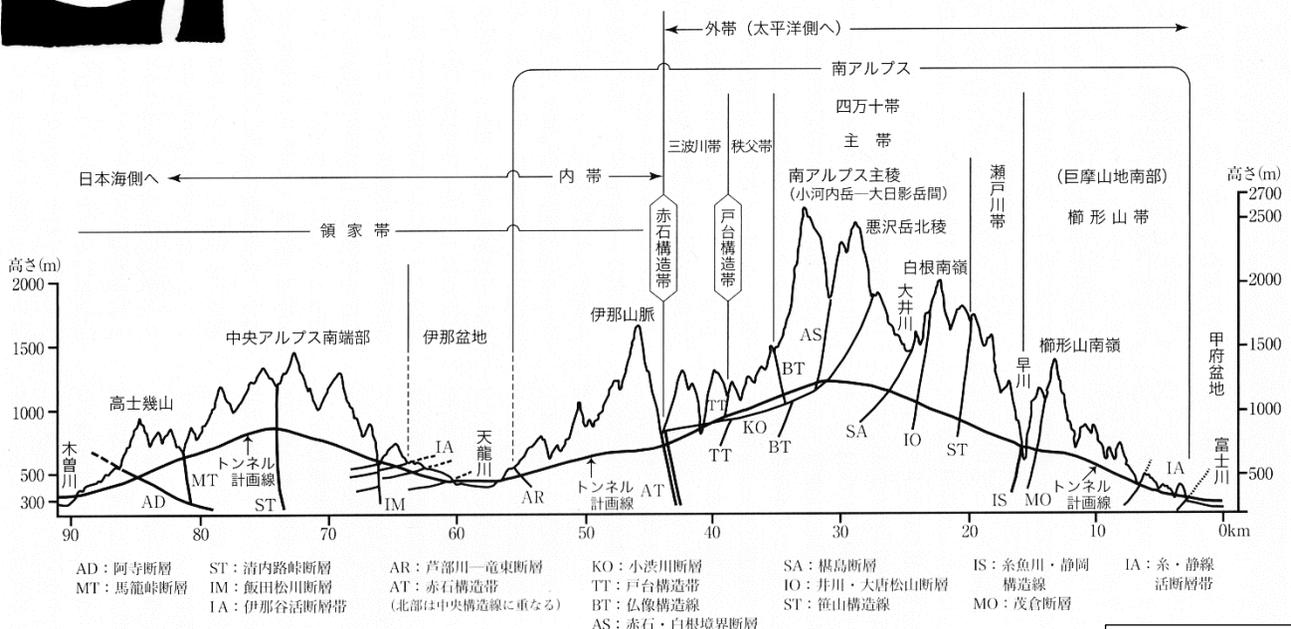


図 リニア中央新幹線トンネル部分の南アルプス-中央アルプス通過計画図
(水平：垂直＝1：10) (トンネル資料は JR 東海による、断層・構造線は松島信幸による)

「日本の科学者」
2014 年 10 月号
14 ページ抜粋

断層-断層-断層-断層……危な～い！ リニア新幹線

木曾川水系連絡導水路計画の取水予定地

いびがわちょうにしだいら
揖斐川町西平を歩く

岐阜市民 粕谷 豊樹



徳山ダムの水を導水路で長良川と木曾川に流すという木曾川水系導水路の計画が愛知、岐阜、三重の3県と名古屋市で合意されたのは2007年8月22日でした。

私達長良川市民学習会は、気温、水温、水質が両川で差異があるのか環境が違

うのか2009年の8月より厳冬の1、2月を除き揖斐川西平と長良川古津で同時刻に採水して分析し記録しています(本稿末尾の水温グラフをご覧ください)。

岐阜市の中心部から303号線を走り、大野町を抜け揖斐川町に入った字長良に発足以来、県庁近くの藪田にあった導水路建設所が何故か昨年12月に移転して来ています。



移転した導水路建設所



揖斐峡大橋

さらに町の中心地と官庁街を通過してしばらく走り揖斐川左岸の高台に出ます。長い新北山トンネルをくぐり抜けるとそこは乙原交差点です。左に折れると赤い揖斐峡大橋がかかり西平ダムの最上流部です。

大橋の上で下流を眺めると正面に間戸山が立ち塞がりダム湖は少し右に寄って流れています。この正面あたりが取水口の予定地です。トンネルが開通する以前、道は正面の中段を通っていましたが(現在の県道271号線)。ダムに下る両岸には県道があり、揖斐峡と呼ばれる景勝地です。揖斐川は最下流の西平ダムを流れ落ちると濃尾平野の西端に出て伊吹山系から流れ出る粕川と合流して流れます。



間戸山と西平ダム湖

この水が長良川に流される。

私は岐阜市の北部、長良川の右岸に住んでいます。毎月、西平にゆくルートは黒野の岐阜大学前を通り本巣町に出て根尾に行く本巣縦貫道を北上します。谷汲口で左に折れ、西国巡礼三十三寺の満願の寺、谷汲山華厳寺の門前を通る県道40号線を使います。

華厳寺の門前を過ぎると山間に点在する集落の中に大きな工場が二つ現れます。島工業サービスそして岩坂峠を越えた木曾屋という字には岐阜工業(株)があります。両社は関連会社で、現在のトンネル工事の主流、シールド工法の主材料のトンネル型



枠を作る会社です。日本のトップシェアーを誇る会社で海外にも進出しています。なぜ、こんな会社が?あまり知られていませんが盛んに生産を続けています。ここを通るたびに日本ではこんなに多くのトンネルが掘られているのだとびっくりします。

揖斐の谷は峻しく川と里の安全を保つために砂防工事が通年、各所で行われています。地元の本拠を置く会社が単独で、またゼネコンと組み公共事業を受注しています。



東海の正倉院と呼ばれる横蔵寺に続く道を左に折れ山間を抜けると303号線の乙原交差点に出ます。

交差点の一等地に揖斐川町の農産物販売所があり、喫茶部門もあります。ここではまず揖斐川レディースと呼ばれる皆さんが出迎えてくれます。新鮮な野菜を買い珈琲と軽食が楽しめます。朝は地元の皆さんが集まります。農閑期には賑やかで、農繁期は私が一人です。

不思議な店です。良い店です。みなさん是非お立ち寄りください。



揖斐の谷は最上流が徳山ダムで途中、数ヶ所のダムが稼働し通年どこかで砂防堰堤の工事音がします。人々は穏やかで保守色が強く物事は丸く収めるという日本固有の通奏低音が流れています。西平ダムの壁頭からはるか濃尾平野が見渡せます。導水路で影響を受けるのはこの都市部の人達です。ここが声を上げないとこの問題は解決しません。

温暖化が進み導水路を使って水を本当に送りたい時、温暖化が巨大な徳山ダムの水をどう変えるのか、変化してしまうのか、私はNEWS32号で指摘をしました。揖斐の谷の皆さんが悪いわけではありませんが、この水が皇室献上の鮎の御漁場の上流、古津から流され、岐阜市の象徴長良川の鶴飼いの真ん中を流れ下ります。

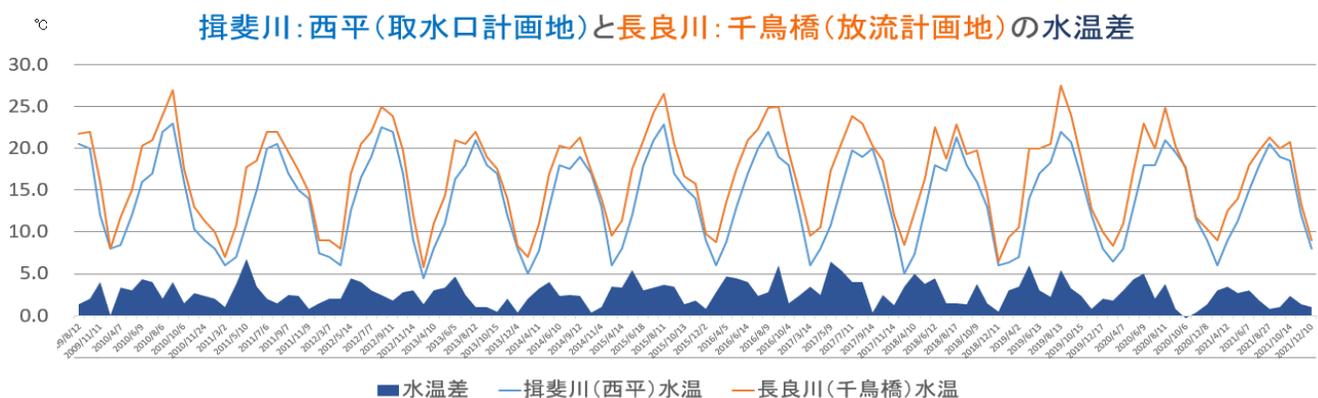
農産物販売所から赤い揖斐峡大橋を渡ると右岸は^{みくら}三倉です。突き当りの山の端で三倉のお地蔵さまが巨体で眼光鋭く取水予定地を睨んでいます。国の凍結した公共事業の最後の保留が木曾川水系連絡導水路事業です。中止にするためには、お地蔵様だけに頼るわけにはいきません。私たち心ある者が皆さんに訴え、環境とそして人の生活と暮らしに不要、有害な巨大公共事業をなんとしても止めましょう。



三倉のお地蔵さま

2009年8月12日～2021年12月 12年間の測定結果です。

やっぱり、いつでも徳山ダムから来る水は冷たいです！



～このままで このままで 流れよ長良川～

「えほん長良川」作者・岩田健三郎さんを訪ねて

長良川市民学習会 田中万寿

会報33号、34号（2021年発行）の表紙に2回にわたり絵を使わせていただいた「えほん長良川」の絵は岩田健三郎さんが描かれました。2021年7月に行ったパネル展の展示で見られた人たちにも大変好評でした。岩田さんは姫路にお住まいであることがわかり昨年11月にお礼とお詫びを伝えに伺い、この絵本が生まれる経緯をお聞きすることができました。

編集をされた岐阜の方には許可を得てはいましたが、会報の表紙に2度も絵を使わせていただきながら岩田さんには直接お願いをせず、本当に申し訳ありませんでした。

いえいえ、「えほん長良川」を大切に扱ってください、うれしい限りです。

私たちは「えほん長良川」の絵を描かれた方はっきり岐阜の方だと思っていました。この絵本の絵を描かれることになったのはどうしてでしょうか？

姫路在住の私が長良川を描いたのは、笠木透さんとの出逢いに尽きます。笠木さんは残念なことに2014年にお亡くなりになってしまいましたが…。1970年代に歌だけではなく陶芸、織、染めなどの民藝、フォークアート運動が起こっていました。その関わりで出会い、その後、「雑花塾」の1人としてコンサートに同行したり、ポスターやCDのジャケットの絵を描かせてもらったりしていました。妻の美樹さんはピアノ演奏で参加していました。山口県の光市へ出かけた時、笠木さんの「光の海」の歌が生まれ、光市の人たちと絵本にすることになりました。「真一文字にひろがる光の海」の詩の一説から、広げると横に長くなる装丁を思いつきました。日本の絵巻や観音開きというお経本の製本法のことを思ったのです。1993年です。この本はその後、イギリスの美術館が古本屋からえらく高価に買い入れてくれたという話を聞きました。私たちには関係はありませんでしたが（笑）…。そして間もなく笠木さんの「長良川」の詩ができましたので、今度は一つの川の源流から河口までを帯のような一冊にするという発想が浮かびました。

実は私は若い頃、30代でしたが、気のあった仲間4人で鳥取県境の三室山（1358m）^{みむろさん}を源流にする千種川という川を河口まで何年かかけて歩いたことがあります。最後は1人で、ヒロシマを目指す「平和行進」に加えていただいて坂越から河口までを歩きました。炎天下、足にマメをつくって、ひきずって、くたくたになって赤穂の海を見たのを昨日のここのように思い出します。あの千種川^{ちくまがわ}の川歩きで、私は絵のテーマを川と川がはぐくんだ暮らし……をライフワークに思ったのです。

この絵本を見た私たちは、ああここは私の町だ、この橋はどこ？こんな魚もいたの？電車も走っていたね？…など、さまざまな想いに浸りながら眺め、そして改めて長良川ってこんなに豊かな川なんだ、と再認識しました。こうした風景や動植物をどのようにして描かれたのですか？

笠木さんの詩は源流から河口までを春、夏、秋、冬で構成されているので、それに沿って描きました。取材は姫路から岐阜まで在来線で何べんも、そうですね100回位もかよいましたかね。私は車に乗れませんので、長良川鉄道



岩田健三郎さんと妻の美樹さん（私はそうよんです）
（2021年11月5日姫路市にて）

やバス、タクシー、時には歩いて。何度も乗った長良川鉄道からの眺めは好きでしたね。笠木さんはじめ、友人や知人、地元の人たちから色々話を聞き、教えてもらい、家に泊めてもらい、ずいぶんお世話になりました。歌詞のはじめは「日本海を渡る人たちの目じるし そびえ立つ山 白い白山」でしたので、白山を描くために石川県へも行きました。生きものや人物は自分の目で見たものに限定しました。その時々到手控えとして葉書大の紙にスケッチし、それらを元に絵本にしたのです。内容は笠木さんの長良川の詩とわたしの絵だけで、その他の一切の説明をしていません。長良川にとって私は他所者（よそもの）です。旅人の目だと思ってあのような絵になったのです。もっと詳しく正確な資料としての絵は、地元のお人がされることとさせていただきます。

この絵本は和紙に印刷されていますし、広げると長さが 13 メートルにもなります。印刷製本はどうされたのですか？

印刷は郡上の印刷屋さんで、紙は地元的美濃和紙で発色のいいものを探してくださいました。13メートルの紙を一度に印刷しているのではなく、13枚に分けて印刷し、それを張り合わせてあります。その作業は郡上の人たち、特にご婦人たちが多勢、公民館のような所に集まって賑やかにおしゃべりしながら作業をされました。本当に手作りです。費用のことなど地元の皆さんにさんざん助けていただけてできたと思っています。何人もの、何十人もの人たちとの“合作”なのです。もっと早く完成する予定でしたが、1997年出版ですから4年ほどかかってしまいました。

この絵本ができた時には既に河口堰は完成していましたが、絵には描かれていませんか？

確かにもうありました。描いた方がいいという意見もありましたが、私は歌詞に「このままで流れよ長良川」とあるように、河口堰のない長良川を願う歌の気持ちを生かそうと思い描きませんでした。

私は地元の川、市川や船場川を描いていますが、身近すぎて、知りすぎて、今だに「光の海」や「長良川」のように一冊にはできていません。はて死ぬまでにできるかどうか…。

海・川・そして3冊目の絵本は山としたいのですが。

河口堰のことも含め「長良川」は日本を代表する川の一つです。どうかどうかいい川に！と願っています。

笠木透さん

岐阜県恵那市生まれのフォークシンガー。(1937~2014) 1969~1971年に中津川フォークジャンボリーの企画・運営に携わる。'71年に「我夢土下座」、'85年に「フォークス」を結成。解散後F・F・Cユニオン、'94年に増田康記、岩田健三郎らと「雑花塾」を結成。小さな町や村など全国各地で活動が続けた。「私の子供たちへ」、「わが大地のうた」、「川のほとり」などオリジナル曲は800曲以上。

岩田健三郎さん

兵庫県姫路市を拠点に活躍されている版画家。(1947~)

生まれも育ちも姫路市。

50年以上毎日、日々の出来事を美しい絵入りの「へらへらつうしん」で発信されています。www.hera-hera.net

岩田さんの版画は姫路駅をはじめ播但線の各駅に飾られているそうです。

編集後記

長良川市民学習会と「えほん長良川」の出会いは、2009年に笠木透さんを招いての「トーク&コンサート・このままで、このままで流れよ長良川」に遡ります。当日、舞台一杯に子どもから大人まで、手に持ったえほんを広げ、透さんのどっしりとした力強い歌声に合わせた参加者全員での大合唱は感動的でした。しかし今まで、笠木さんの詩をもとに素晴らしい絵を描かれた作者については存じませんでした。



た。今回岩田さんにお会いし、笠木さんとの縁、取材にまつわるお話を聞かせていただくことができました。「他所者の僕が描いたこのえほんが、長良川を大切にしようという運動に今も役立っていると知り本当にうれしい限りです」という岩田さんの言葉を、私たちへのあたたかい激励の言葉だと感じました。

取材：岡久米子、武藤仁、田中万寿（文責）



日本海を渡る 人たちのめじるし
そびえたつ山 白い白山
雪どけ水が 清水となって
生まれたばかりの 川は流れる
谷間の町だよ 郡上八幡
赤いちょうちん 盆おどり
町のざわめきを ぬうように
水の音がする 川は流れる
空が広いね 濃尾平野
水にとびこむ 黒い子どもたち
堤防を走る ランナーの姿
日ざしを浴びて 川は流れる
太平洋を およぎまわり
母なる川に 帰ってきた
サツキマスよ 銀色の光

「えほん長良川」

1997年発行 A4折本 50頁 絶版 詩：笠木透 え：岩田健三郎 発行者：えほん「長良川」をつくる会編
出版社：フィールド・フォーク・カルチャー（F・F・C）

『えほん長良川』は美濃和紙で折りたたみ編集され、雪を頂く源流から踊りの町郡上、刃物の町関、路面電車が走る岐阜市、濃尾平野、そして伊勢湾へと、流域の人びとの暮らしのなかを子ども、魚、鳥とともに流れていく姿を描いています。展開すると約13メートルの帯になり、「このままでこのままで流れよ 長良川」の思いを貫いています。

「えほん長良川」を図書館へ寄贈しました

編集、発行に携われた郡上市の野田さんから、個人で保存されていた本を安く長良川市民学習会へ譲っていただきました。絶版になっている貴重な本ですので、その一部を多くの方が利用される長良川流域と作者の出身地の図書館などへ寄贈しました。みなさんの近くの図書館でぜひご覧ください。

*寄贈先：美濃市立図書館、岐阜市立図書館、大垣市立図書館、桑名市立図書館、恵那市立図書館、ハートピア安八図書館、姫路市立城内図書館、国立国会図書館・国際子ども図書館、東京子ども図書館。

*既に入っている図書館：岐阜県立図書館、郡上市立図書館、関市立図書館。

*寄贈先からのお礼

●「えほん長良川」を御寄贈いただき誠にありがとうございました。当館の郷土資料室ではふるさとの資料を収集しており、御寄贈いただいた本もその一冊として活用させていただきます。恵那市中央図書館

●国際子ども図書館は国立国会図書館の支部図書館で、国立国会図書館で広く収集された国内の出版物のうち児童書に分類されるものを所蔵しております。御作は当館に所蔵がなく、また現在は絶版とのことで、大変ありがたく存じます。国際子ども図書館

「岐阜シンポジウム」と「愛知県民講座」のご案内

第38回岐阜シンポジウム

木曾・長良・揖斐
歴史、自然、地域づくりを考える

日時 2022年3月21日(月・祝) 13:30~16:40

会場 岐阜大学 講堂 岐阜市柳ヶ原1-1 岐阜大学内
同時オンライン配信あり

岐阜大学

愛知県長良川河口堰最適用検討委員会 県民講座

「長良川河口堰の現在の課題と最適運用について」

日時: 令和4年3月26日(土) 13:00~16:40 (開場: 12:00)

会場: ウィンクあいち 名古屋市中村区名駅4丁目4-38 3F名古屋 名鉄名古屋 近鉄名古屋 名鉄トランスコスモスエア方面に徒歩5分

第一講 13:05~(180分)
講演: 「流域治水への歴史的転換とこれからの課題」
講師: 嘉田 由紀子氏 (参議院議員・前滋賀県知事)
報告: 「長良川河口堰の現在の課題と最適運用について」
報告: 武藤 仁 氏 (愛知県長良川河口堰最適用検討委員会)

第二講 14:40~(120分)
パネラー: 小島 敏郎氏 (愛知県政策顧問)
伊藤 達也氏 (法政大学文学部 教授)
蔵治 光一郎氏 (東京大学大学院農学生命科学研究科・教授)
新村 安雄氏 (環境コンサルタント・映像クリエイター)
向井 貴彦氏 (岐阜大学地域科学部 教授)

【定員】50名
【申込期間】2/22(水)~3/18(土)

主催: 愛知県長良川河口堰最適用検討委員会

3月26日(土) 13:00~16:40
ウィンクあいち 10F 1002 会議室

- 講演 流域治水への転換とこれからの課題
嘉田 由紀子氏
(参議院議員・前滋賀県知事)
- 報告 長良川河口堰の現在の課題と最適運用
武藤 仁 氏
(愛知県長良川河口堰最適用検討委員会)

【申込先】愛知県建設局水資源課
電話 052-954-6121 FAX052-961-3293
Mail mizushigen@pref.aichi.lg.jp
締切 3月18日

3月21日(祝) 13:30~16:40
岐阜大学 講堂
申込み締め切り 3月18日
電話 ☎ 058-293-3339
メール gfsympo@gifu-u.ac.jp

- シンポジウム コーディネーター: 小島 敏郎 氏 (愛知県政策顧問)
- パネラー 嘉田 由紀子 氏 (講師)、武藤 仁 氏 (報告者)
- 伊藤 達也 氏 (法政大学文学部 教授)
- 蔵治 光一郎 氏 (東京大学大学院農学生命科学研究科・教授)
- 新村 安雄 氏 (環境コンサルタント・映像クリエイター)
- 向井 貴彦 氏 (岐阜大学地域科学部 教授)

本の紹介

みなさん「ネオニコチノイド」って知ってますか?世界的にミツバチの大量死を引き起こしたとされるあの殺虫剤です。あのネオニコが今日の「魚の減少」も引き起こしているというエビデンスを世界に示した山室真澄さんの著作です。(武藤)

魚はなぜ減った? — 見えない真犯人を追う

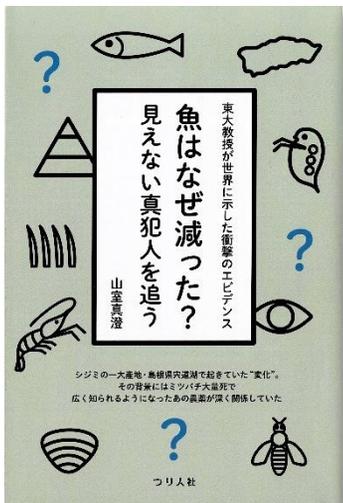
山室真澄 著 「つり人社」発行

私が著者を知ったのは、一昨年金沢市で開かれた陸水学会の催しです。「汽水域の現状」をテーマにしたもので私の長良川の稚拙な報告の前にされた山室さんの宍道湖におきていたネオニコの影響の報告は衝撃的でした。有名な科学誌「Science」にも掲載されたことを某新聞の科学欄で知り、ぜひもっと内容を詳しく知りたいと思っていたところ、この度、「つり人社」から「魚はなぜ減った?」と題してつり人や川や海に親しむ人にもわかりやすく書かれ出版されました(定価 1000 円)。

読んでいて、個人的にはネオニコ使用開始が長良川河口堰運用と時期的に重なり、生物環境悪化の河口堰の「罪」を炙り出すのに、ネオニコが大きな障害になっているなあと感じました。例えば、河口堰の閉鎖でユスリカの大発生が予想されたが、

すぐに減り始める意外な現象がありました。粕谷先生は長良川下流域生物相調査報告書 2010 の中で、環境ホルモンの影響を推察されていましたが、符合するところがあるように感じました。

著者は、子供のころの長良川河口でジミ採りの原体験から、汽水域の環境や化学物質の研究をライフワークとされたそうで、長良川仲間?のような親近感を感じました。



追悼

高木久司さん 長良川河口堰建設に反対する会・岐阜代表

長良川河口堰建設に反対する会・岐阜の代表、高木久司さん（69歳）が2021年11月6日に亡くなった。

奥さんから高木さんが亡くなったとの電話をもらったこの日は、長良川市民学習会スタッフで行なった下流域環境調査のため1年ぶりに訪れた河口堰から帰る途中でした。

高木さんが河口堰建設反対運動に飛び込んだのが1988年とのこと、私を知り合ったのは1991年。

すでに代表の高木さんと事務局長の天野礼子を中心となり、河口堰建設反対運動は「長良川を守れ」と全国から集まった人々で大きな運動になっていました。

特に河口堰上流の左岸河川敷での反対集会「長良川 DAY」は建設現場でのカヌーデモや海外からもゲストを招くなど、国内だけでなく世界的に関心を集めるイベントに発展しました。

彼は、反対集会を開催するという大変な中でも、自分が育った自慢の長良川を大切に思って参加し、楽しそうに過ごしてくれる多くの人を見るのが大好きだったように思います。

その後、1995年に河口堰は完成・運用され始めてしまい、長良川的环境はどんどん悪くなりつつありますが、それでも高木さんにとって、長良川はまだ自慢の川であり続けていました。

そして「これからの長良川を守るのは子ども達！」と川に関心を持ってもらうため、川で遊んで学ぶ水ガキ講座の「長良川 DAY」へとつなげていきました。子ども達をラフトボートに乗せて川を下るときの高木さんの生き生きとした姿が今も目に浮かびます。まだまだ一緒に粘り強く、楽しく運動を続けていきたくったのに本当に残念です。

長良川を守るために過ごした33年間、ありがとうございました。

長良川河口堰建設に反対する会・岐阜 堀 敏弘



河合良房 弁護士



2021年12月2日、河合良房弁護士（74歳）が亡くなりました。

岐阜県弁護士会長や、中部弁護士連合会の理事長などを歴任。鉱山やトンネル工事などを巡るじん肺訴訟で弁護団長を担うなど労働者を守るとともに子どもの人権に関する活動などにも力を注がれ、市民団体「子どもの人権ネットワーク・岐阜」の代表も務められました。

私が、河合先生と出会ったのは2013年12月6日の特定秘密保護法の強行採決がきっかけでした。人権と平和の危機を感じた私たち市民有志は、「秘密保護法廃止を求める岐阜の会」を立ち上げ河合先生に代表をお願いしました。安倍政権は2014年集団的自衛権の閣議決定、2015年戦争法の強行採決・・・と次々と反動的な政治を推し進めました。これに対し「もう黙っとれんアクション実行委員会」に続き様々な市民団

体とグループが参加する「岐阜総がかり行動実行委員会」が立ち上がり、約 1000 人が参加する集会とデモにまで運動の輪が広がりました（デモの中に長良川市民学習会の幟もはためきました）。その先頭に常に立ってこられたのが河合先生でした。そして、先生の幅広い市民から信頼される人格のおかげで、岐阜では難しかった市民と野党でつくる組織「ピースハートぎふ」の結成も実現し選挙も戦いました。

しかし昨年 3 月ごろ不治の病がわかりました。「余命を告げられた」河合先生は、無念の限りであったでしょう。にもかかわらず、苦痛と闘いながら会議の進行、宣伝行動、集会、デモの先頭に立たれました。今、生かされている私たち、先生の遺志を引き継ぎ、前に向かって進みたいと思います。（武藤仁）

岐阜総がかり行動での色々な活動の中で、ほんの一面とは思いますが私が感じた河合先生の事を、紹介させていただきます。

それは昨年、台風一過の爽やかな青空の暑い強い日差しの「9・19 岐阜総がかり行動」第 21 弾の日の事です。病気の進行で痩せられたなあ・・・と思いながら代表としての挨拶後の先生を、私は集会本部から見っていました。他の方の挨拶が続く中、「アッ、椅子にかけて木陰で待機してもらおう」と椅子を用意したのですが、それに気づかれた先生は直ぐに、ごくさりげなく「有り難う、大丈夫です！」と腰を伸ばし赤いボード「一票一揆」を持ち立ち続けておられました。体調が悪くても参加者と一緒に！！の強い覚悟が感じられ、私には次の言葉が出ませんでした。

長良川市民学習会にも好意的にお力をいただきました。

強いお気持ちで私たちのこれからを指し示してください、本当に有り難うございました。私たちの力はとても小さいのですが、無力ではありません。先生のお気持ちを忘れず、皆で 精一杯努力してまいります！！先生安らかに お眠りください・・・。（岡久米子）

事務局から

●ゆうちょ銀行振り込み手数料が改正されました

日頃より長良川市民学習会の活動にご支援をいただきありがとうございます。この会報は今まで学習会に参加された方、講師の方、お世話になった方々にお送りしています。私たちの会は会員制ではありませんので、支援して下さる皆さんのカンパで運営しております。毎回、振り込み用紙を同封させていただいていますが、お気持ちのある時にお使ください。

2022 年 1 月から、振り込み手数料が、ATM を使っても、現金で支払いの場合には 110 円加算され、振込者様の負担になります。ゆうちょ銀行の通帳、またはキャッシュカードを利用して、口座からお支払いの場合は従来通りとのことです。どうぞよろしく願いいたします。

●会報へ皆様のご意見、作品をお寄せください

この会報は長良川やこの地域の環境に関心を持っている全ての人たちの意見交換、交流の場でありたいと思っています。「川との思い出」「こんな川にしたい」など、ぜひ皆さんの思いを事務局へお寄せください。

●パネル展「よみがえれ長良川 2022」（計画中）にご参加ください

今年は拡充し、7 月 8 日（金）～14 日（木）岐阜メディアコスモス・ギャラリーにて開催の予定です。



「よみがえれ長良川」実行委員会の参加 30 団体を紹介しています。
第 13 回は「横越「遊水地」問題学習会さんです。

参加団体紹介 13

横越「遊水地」問題学習会

横越「遊水地」問題学習会 代表 野津 牧

国土交通省は、岐阜市を水害から守るために長良川中流域に遊水地を計画しています。建設予定地は、最終的に 6 候補地から関市池尻と美濃市横越が選ばれました。

私たち美濃市民有志は、候補地中、唯一河道内に計画されており、環境面や水害対策上の問題がある横越地区の建設に反対する立場から学習会を立ち上げました。

横越に計画されている遊水地は、写真のように長良川の中州に計画されており、本川を 2 倍に広げる計画です。貴重種が息していると思われる自然豊かな支流も堤防になります。

世界農業遺産とオオサンショウウオの生息場所

本川の長良川は「長良川の鮎」で世界農業遺産に認定されています。建設予定地は、友釣り専用区になっており、本川が掘削される計画ですので鮎漁や景観にも多大な影響が出ます。

また、横越には特別天然記念物のオオサンショウウオの生息が確認されており、生息場所が奪われます。

総工費 108 億円をかけ水害の危険性も増す

計画予定地は、明治以降、10 回以上水害の遭った場所ですが、河道内に構造物が作られるため、増水時の川幅は狭くなります。流れも直線的になるため、堤防の湾曲部に負荷がかかり、豪雨時の堤防決壊の危険性も増します。

宣伝活動や交渉を継続中です

私たちの会では、12 月に新聞折込で全市に遊水地の問題点を示すチラシを配布すると共に河川事務所や美濃市、地元自治会に要請行動を行っています。



ご参加ください

- 3月 21 日(月・祝)第 38 回岐阜シンポジウム「木曾・長良・揖斐」歴史、自然、地域づくりを考える
13:30～16:40 岐阜大学 講堂
- 3月 24 日(木)設楽ダム第二次訴訟 判決 15:00～名古屋地方裁判所
- 3月 26 日(土)愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会 県民講座
13:00～16:40 ウィンクあいち 10 階 1002 会議室

発行：長良川市民学習会 <http://dousui.org/>

代表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298
〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1
mutohitoshi@yahoo.co.jp



私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403
口座名称：長良川市民学習会

本ニュースのバックナンバーは <http://dousui.org/news/index.html> でご覧になれます。